

特別活動の評価様式に関する調査研究(1) —埼玉県西部・南部教育事務所管内の小学校通信簿の分析から—

高橋 克己*・綾 牧子**

On the Style of Evaluating Extra-curricular Activities (1): An Analysis of School Reports on Saitama Prefecture Elementary Schools in the West and South

Katsumi TAKAHASHI, Makiko AYA

要旨 本稿は、埼玉県西部・南部教育事務所管内の公立小学校の通信簿において、特別活動の評価様式がどのように設定されているかを報告するものである。特別活動に関する独立した評価欄の有無とタイトル名、特別活動事実欄の有無およびその実態、特別活動所見欄の有無およびその実態の三つについて、1-3年・4-6年ごとに詳細な比率を報告している。またその組み合わせパターンについても代表例を示した。しかし、今回の対象校は県下の一部の地域（西部・南部のみ）に限られるため、本格的な比較考察は行っていない。

キーワード：特別活動 評価様式 通信簿 指導要録 委員会活動・クラブ活動

1. はじめに

(1) 調査の意図

本稿は、埼玉県内の公立小学校の「通信簿」（さまざまな名称があるが、以下、通信簿とする）において、特別活動に関する評価項目がどのように設定されているかを調べようとするものである。

もともと特別活動の評価は、特にテストもなく、また広範囲にわたるため、その難しさがこれまでも指摘されてきた。近年の教育改革の中でも、試行錯誤がなされてきたところである。平成10年版の学習指導要領改訂の際、指導要録の参考様式における各教科の評価様式は、「生きる力」を育てるものにふさわしいよう、相対評価から絶対評価へと変えられた。それに伴い、評価規準の明確化などが行われてきた。さらに、平成20年版学習指導要領対応の参考様式では、特別活動の評価においても、各学校ごとに「観点」を定める

様式が導入された。しかし、特別活動の評価は各教科とは異なる性質を持つ。客観的な指標が乏しいこと、広範囲に及ぶこと、さらに言えば、特別活動はそれ自体豊かな人間性を育む教育活動であると同時に、他の教育活動を効果的に進めるための条件整備としての機能もあり、その評価は一筋縄ではいかない。

ただ、その本質的な議論をすることがここでの目的ではない。指導要録とは別に、各学校において作成されている通信簿において、特別活動はどのように評価されているのかを調べることにより、そうした本質的な議論に資することを目指すものである。往々にしてそうした本質的な議論は、理念と理念、価値観と価値観の対立となり、結論が出にくいものである。まずは、各学校において特別活動はどのように評価されているのかという資料があれば、議論しやすいのではないだろうか。

もちろん、そうした資料が従来まったく存在しなかったわけではない。国立教育政策研究所は、

*たかはし かつみ 文教大学教育学部教職課程

**あや まきこ 彰栄保育福祉専門学校

2003年5月『通信簿に関する調査研究』をまとめている。この研究では、日本全国から集めた通信簿を、各教科、行動の記録、特別活動の記録などの項目別に調べ、代表的なパターンをそれぞれいくつか抽出している。ただ、その意図は、時期的に絶対評価導入の直後であることから、そうした評価様式の改革が各学校にどの程度浸透しているかを確認することとなっている。それゆえ、特別活動の評価様式がどうなっているか、一定の分類枠組みを設定して数値を示すという事は行われていない。

そこで本稿は、埼玉県という限られた地域ではあるものの、その地域において特別活動の評価様式がどうなっているかを可能な限り厳密に類型化し、上記議論の資料とできるよう意図している。今回、後述するように、県下の4割弱の学校から通信簿を収集することができた。また分類枠組みについて、試行錯誤の末、従来にない独自の枠組みを創作し、それに基づいて一つ一つの通信簿を分析した。それゆえ、新たな分類枠組みの提案という意味では、本稿は研究論文という性質も有している。

にもかかわらず、本稿を「調査報告」扱いとしたのは、以下の二つの理由からである。一つは、「結びに代えて」をお読みいただければおわかりの通り、調査結果に関する本格的な考察を行っていないことである。また、もう一つは、タイトルに(1)と付けていることからお分かりのように、本稿はあくまで部分的な分析結果の報告であり、西部教育事務所と南部教育事務所管内のそれぞれ84校74校分の通信簿を扱うにとどまる。他地域については、今後順次扱っていく予定である。そして本格的な考察は、結果が出そろった段階で行うべきと考えた。

(2) 調査の方法

①対象とした通信簿

まず通信簿の収集過程について説明する。平成18年10月下旬、埼玉県内の公立小学校826校宛に「教育研究へのご協力をお願い」という文書を

郵送し、通信簿の提供を求めた。結果、全体の4割弱の学校から集めることができた。その詳細は以下の通りである。

表1 事務所別収集校数および回収率

	全管轄校数	収集校数	回収率
北部教育事務所	80	29	36.3%
南部教育事務所	199	74	37.2%
東部教育事務所	199	88	44.2%
西部教育事務所	221	84	38.0%
秩父教育事務所	27	10	37.0%
さいたま市	100	32	32.0%
計	826	317	38.4%

(平成18年度当時のもの。分校を含む。)

対象とした通信簿について、本稿の限界を二点述べておかねばならない。一つはその古さである。本稿で扱っている通信簿は、平成18年度に使用されていたものであり、現在からみて5年も過去のものである。しかもこの5年の間に指導要領改訂に伴う指導要録参考様式の改訂があり、現在とは状況が大きく異なっている。それゆえ、本稿の結果は、「改訂以前の実情」を示したものとして理解する必要がある。

もう一つはサンプリングの問題である。今回の収集において、送る・送らないの判断は学校側に委ねられていたため、厳密にはランダム・サンプリングとは言えない。工夫を凝らした特殊な評価様式は調べたいところであるが、そういう学校こそ送付していただけなかった可能性がある。それゆえ、今回報告する集計結果は、一つの参考資料という扱いにとどまらざるを得ないであろう。しかし、それでも従来なかった詳細な分類枠組みによって、県下の4割弱の学校から集めた通信簿を分析した結果であり、それなりの意義は有すると考えている。

②指導要録における特別活動の評価様式と本報告における三分類

各学校の通信簿における特別活動の評価様式をどのように類型化して集計するか。今回、基本的

に指導要録の参考様式を出発点とした。指導要録の参考様式において、特別活動は従来、「活動の状況」と「事実及び所見」という形で評価されてきた。平成20年版対応の指導要録の参考様式においても、それは維持されている（注1参照）。

各学校で作成される通信簿の様式は基本的に自由であるが、指導要録の参考様式はそれなりに影響していると思われる。そこで本稿では、特別活動に関する評価欄を、以下の三つのタイプに分けてとらえることにした。すなわち、状況欄、事実欄、所見欄である。なお、こうしたとらえ方は、国立教育政策研究所『通信簿に関する調査研究』（2003年5月）においても採用されており、ある程度一般的な分類であると考えられる。

・状況欄

学級活動・児童会活動・クラブ活動・学校行事の各内容毎に「十分満足できる活動の状況にある」と判断される場合に、○印を記入する」欄のことであり、表形式をとる。

・事実欄

当該児童が所属する委員会やクラブ、学級で担当している係等の名称を単語で記載する欄である。単語で記載するため、小さな欄もしくは、「()委員会・()クラブ」のように()でくくられた欄となる。

・所見欄

当該児童の活動の様子を、文章で表記する欄である。文章で表記するため、それなりの大きさの欄が必要となる。

ただし、実際の通信簿の様式は非常に多様であり、まるで分類を拒むかのようなものであった。たとえば、事実欄なのか所見欄なのか、判断に迷うようなケースも珍しくなかった。そこで本稿では、注2に示すような操作的分類基準を設けて、やや強引に学年別一覧表を作成していった。なお、今回は状況欄が記載された通信簿が一つもなかったため、状況欄の分析は行っていない。

以下、西部教育事務所と南部教育事務所管内の

公立小学校の通信簿における特別活動の評価様式について、それぞれ以下の三つの観点から調査結果を報告し、その後、パターン化して概観していくことになる。

- ・そもそも特別活動に関する独立欄があるか否か、また存在する場合その欄の名称。
- ・事実欄があるか否か、およびその内実。
- ・所見欄があるか否か、およびその内実。

③学年のまとめ方

ただ、報告する上でもう一つ問題がある。本研究では1年から6年まですべて学年別に集計作業を行った。それは二つの理由による。一つは、今回収集できた通信簿は一つの学校でもすべての学年がそろっているわけではなく、たとえば6年のみ送付いただけの学校や、1・3・5年のみ送付いただけの学校などがあることによる。以下に示す集計で、同一管内であっても学年によって合計学校数が異なるのはそのためである。

そしてもう一つの理由は、学年によって特別活動の活動内容は異なるため、評価項目も変化するからである。たとえば、4年ではクラブ活動は実施されるが委員会活動はない、5・6年は両方ある等。それゆえ、異学年の通信簿を同一枠組みで分類することは難しい。ただ、一通り学年別に集計作業を行った結果、1-3年、4-6年については類似するケースが多いことが分かってきた。すべての学年について報告する煩雑さを避け大きな傾向をつかむため、本稿では以下、1-3年、4-6年という二つの区分について上記三観点からそれぞれ報告していくことにする。なお、今回西部教育事務所については高橋が、南部教育事務所については綾が担当した。

2. 西部教育事務所管内の分析結果

(1) 特別活動の評価に関わる独立欄の有無とそのタイトル名

まず、特別活動の評価に関して、独立した欄が設定されている通信簿とそうでないものに大きく

分けられる。独立欄が設定されている通信簿とはどのくらいあるのだろうか。そして、その場合、どのようなタイトルが付けられているのだろうか。

分析した対象校にズレがあるため、若干数字の違いはあるが、やはり1-3年と4-6年の通信簿では、特別活動の評価様式についてはほぼ同じ傾向を見て取ることができる。西部管内の小学校については以下のことを指摘できよう。

独立欄なしの多さ（特に1-3年）

まず気づくことは、特別活動の評価について独立した欄を設定していない学校がけっこう多いということであろう。指導要録には「特別活動の記録」という状況欄が存在することを考えるとこれは意外である。比率で見ると、総合所見欄に特別

活動に関する記述を含めることが明記されている場合も含めるなら、1-3年で約半数（51.9%）、4-6年で約3分の1（32.5%）にのぼる。1-3年で特に多い理由については、後述するように4-6年の通信簿に「(委員会)・クラブ名」という簡単な事実欄が設定されている場合、同校の1-3年ではそうした欄がなくなってしまうことが多いと思われる。

「特別活動の記録」等というタイトルの多さ

それでも、1-3年で約半数、4-6年で約7割の学校では、特別活動の独立欄が存在することになる。そして、特別活動の評価について独立した欄が設定されている場合、もっとも多く見られるタイトル名は「特別活動の記録」あるいは「特別活動のきろく」等である。1-3年・4-6年とも、独

表2 西部1-3年特活評価欄のタイトル名

	1年実数	%	2年実数	%	3年実数	%	実数平均	1-3年%平均
「特別活動の記録」等	18	25.4%	18	26.1%	20	28.6%	18.7	26.7%
「特別活動等の記録」等	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0.0	0.0%
「特別活動の様子」等	8	11.3%	8	11.6%	8	11.4%	8.0	11.4%
「特別活動」等	3	4.2%	3	4.3%	3	4.3%	3.0	4.3%
その他	2	2.8%	2	2.9%	2	2.9%	2.0	2.9%
タイトルなし	2	2.8%	2	2.9%	2	2.9%	2.0	2.9%
特活独立欄なし (総合所見欄等にあり)	5	7.0%	4	5.8%	4	5.7%	4.3	6.2%
特活独立欄なし (まったくなし)	33	46.5%	32	46.4%	31	44.3%	32.0	45.7%
	71	100.0%	69	100.0%	70	100.0%	70.0	100.0%

※未収集を除く、以下同様。

※「ようす」「など」のひらがな表記は漢字表記と同等とみなした。以下同様。

※「その他」とは「活動状況の記録」「係活動」。

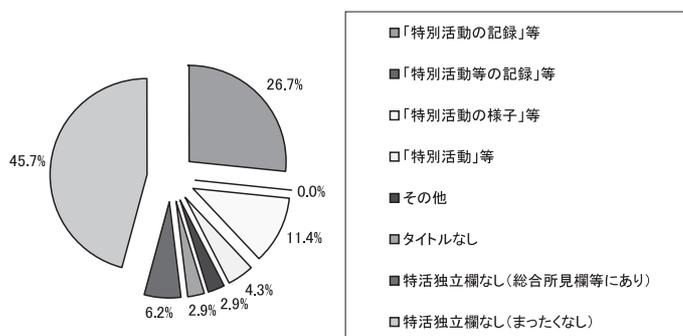


図1 西部1-3年タイトル名%平均

表3 西部4-6年特活評価欄のタイトル名

	4年実数	%	5年実数	%	6年実数	%	実数平均	4-6年%平均
「特別活動の記録」等	22	31.0%	24	32.9%	25	32.1%	23.7	32.0%
「特別活動等の記録」等	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0.0	0.0%
「特別活動の様子」等	8	11.3%	8	11.0%	8	10.3%	8.0	10.8%
「特別活動」等	5	7.0%	5	6.8%	5	6.4%	5.0	6.8%
その他	4	5.6%	5	6.8%	5	6.4%	4.7	6.3%
タイトルなし	7	9.9%	9	12.3%	10	12.8%	8.7	11.7%
特活独立欄なし (総合所見欄等)にあり)	7	9.9%	5	6.8%	5	6.4%	5.7	7.7%
特活独立欄なし (まったくなし)	18	25.4%	17	23.3%	20	25.6%	18.3	24.8%
	71	100.0%	73	100.0%	78	100.0%	74.0	100.0%

※「その他」とは、「特別活動の所属」「委員会活動・クラブ活動の所属」「クラブ・委員会活動」「諸活動の記録」「特別活動の記録(係等)」。

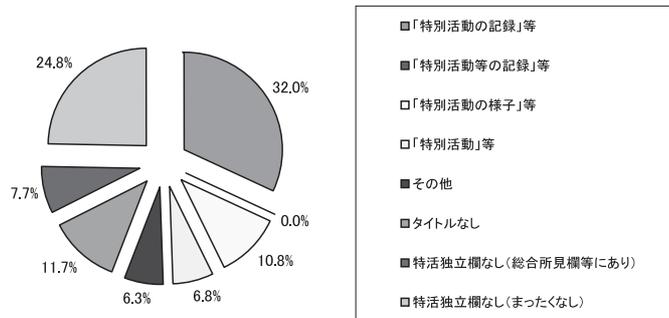


図2 西部4-6年タイトル名%平均

立欄がある学校の半数程度がこの名称を採用していることになる。次いで、「特別活動の様子(ようす)」等、さらに「特別活動」と続く。この順位は1-3年・4-6年で共通している。指導要録の特別活動の評価欄(状況欄)のタイトルが「特別活動の記録」であることが影響しているのだろうか。ただし、状況欄は西部地区には一つもなく、事実欄・所見欄にこのタイトルが付されているのである。

(2) 事実欄の評価様式

次に、事実欄を見てみよう。上述の通り、これは委員会やクラブ、係活動などを単語で記載する欄である。既に述べたように、特別活動は、学年によって活動内容に違いがあり、通常5・6年には委員会活動とクラブ活動があるが、4年はクラブ活動のみ、3年以下はいずれもない。それゆえ

本来、学年ごとに集計しなければならないが、本稿では1-3年と4-6年分けて報告することにした。その際、「委員会・クラブ(学年ごと)」という枠には、委員会活動欄のない「クラブ(学年ごと)」という欄も含めている(4年はそうなる場合が多い)。同様に、「委員会・クラブ(学年ごと)、係など(学期ごと)」という欄には、委員会活動欄もクラブ活動欄もなくただ学期ごと係活動名を記す欄も含めている(1-3年はそうなる場合が多い)。

ここでも、分析した対象校にズレがあるため、若干数字の違いはあるが、やはり1-3年内部と4-6年内部の通信簿では、特別活動の評価様式(事実欄)についてはほぼ同じ傾向を見て取ることができる。ただし、両者間ではかなり傾向が異なっている。西部管内の小中学校については以下のことを

表4 西部1-3年特活事実欄の様式

		1年実数	%	2年実数	%	3年実数	%	実数平均	1-3年%平均
①	「委員会・クラブ(学年ごと)」	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0.0	0.0%
②	「委員会・クラブ(学年ごと), 係など(学期ごと)」	13	18.3%	13	18.8%	14	20.0%	13.3	19.1%
③	その他	3	4.2%	3	4.3%	3	4.3%	3.0	4.3%
④	特活独立欄はあるが特活事実欄はなし	17	23.9%	17	24.6%	18	25.7%	17.3	24.8%
⑤	特活独立欄なし(総合所見欄等)にあり	5	7.0%	4	5.8%	4	5.7%	4.3	6.2%
⑥	特活独立欄なし(まったくなし)	33	46.5%	32	46.4%	31	44.3%	32.0	45.7%
		71	100.0%	69	100.0%	70	100.0%	70.0	100.0%

※「学期ごと」とは、二学期制・三学期制を含む。以下同様。

※「その他」とは、学期ごと係、「水泳検定」「なわとび検定」「実行委員」「賞状授与」などの組み合わせ。

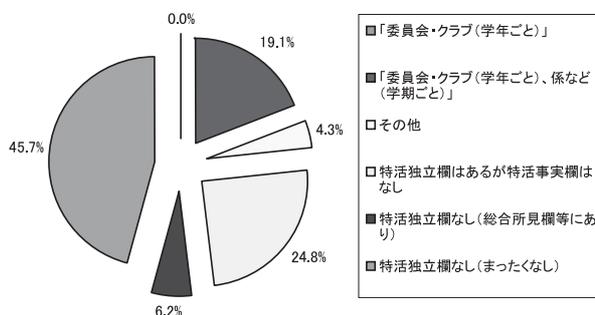


図3 西部1-3年特活事実欄の様式

表5 西部4-6年特活事実欄の様式

		4年実数	%	5年実数	%	6年実数	%	実数平均	4-6年%平均
①	「委員会・クラブ(学年ごと)」	25	35.2%	30	41.1%	28	35.9%	26.5	37.4%
②	「委員会・クラブ(学年ごと), 係など(学期ごと)」	11	15.5%	11	15.1%	14	17.9%	12.5	16.2%
③	その他	4	5.6%	6	8.2%	6	7.7%	5.0	7.2%
④	特活独立欄はあるが特活事実欄はなし	6	8.5%	4	5.5%	5	6.4%	5.5	6.8%
⑤	独立欄なし(総合所見欄等)にあり	7	9.9%	5	6.8%	5	6.4%	6.0	7.7%
⑥	特活独立欄なし(まったくなし)	18	25.4%	17	23.3%	20	25.6%	19.0	24.8%
		71	100.0%	73	100.0%	78	100.0%	74.0	100.0%

※「その他」とは、学期ごと係、「水泳検定」「なわとび検定」「実行委員」「児童会」「賞状授与」などの組み合わせ。

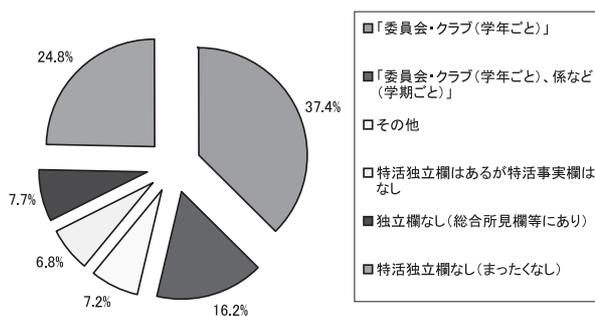


図4 西部4-6年特活事実欄の様式

指摘できよう。

4-6年における「委員会・クラブ」の多さと1-3年におけるその不在

まず、4-6年で3分の1程度にのぼる「委員会・クラブ（学年ごと）」（前述のとおり、4年では委員会がなく、クラブだけの欄になる場合がほとんどであるがそれも含めている）は、事実欄の代表的様式と言えるだろう。1-3年と4-6年でグラフの形が大きく異なってくるのは、1-3年の通信簿には、「委員会・クラブ」を記載する事実欄が存在しないことが大きい。

ただし、単純に4-6年の「委員会・クラブ」（35.6%）がすべて、1-3年の「特活独立欄なし」（45.7%）になってしまうのではない。4-6年にも独立欄なしが24.8%あるので、1-3年の6割が独立欄なしになりそうだが、そうはなっていない。ここでは事実欄のみに着目して集計しているため、ややわかりにくいかも知れない。つまり、事実欄がない通信簿には、独立欄がまったくない場合と、事実欄はないけれども所見欄はあるという二つの場合がありうる。また事実欄ありにも、事実欄のみの場合と所見欄も併設されている場合とがある。所見欄も同様である。今回クロス集計をしていないので、その組み合わせのパターンがどうなっているかについては分からない。例をあげると、後述する所見欄が事実欄に併設されている場合、4-6年では「委員会・クラブ」欄あり、1-3年では「特活独立欄はあるが事実欄はなし」に分類されることになる。それゆえ、1-3年の「まったくなし」と「事実欄はなし」の二つの数字が4-6年よりも、多くなっていると考えられる。

なお、ここではあくまで事実欄のみに着目した、いわば「ヨコの」集計を報告している。各学校毎の学年別変化を視野に入れた代表的パターン、いわば「タテの」分析については、クロス集計にまでは至っていないが、若干の分析を行ったので、後述したい。

委員会・クラブ重視の事実欄、およびそれに伴う集計処理上の問題

事実欄の記入内容としては、委員会・クラブ以外にも、学級内における係活動が想定されるが、係活動の事実欄は2割弱程度しか見られない。このグラフを見る限り、前二者に比重が置かれ、係活動の事実記入はやや軽視されているようにも思われる。係活動だけならば、わざわざ独立した事実欄を作るより、所見欄に含めてしまえばよいと考えられているのかも知れない。

ただ、実際には係活動の事実欄と所見欄は区別しにくい場合が多い。たとえば、「特別活動の記録」と題された学期ごとの小さな欄があってその右隅に「係」という漢字が小さく書かれている場合、書き手（すなわち担任教師）によっては小さな字でちょっとしたコメントを書こうと思えば書けなくもないし、係活動名のみ記入してもそれはそれで形になる。つまり、書き手によって、事実欄、所見欄のどちらにも使えるような、そういう通信簿がけっこう見られた。本研究では、注2に示した通り「おおよそ2行以上のコメントを記入できると想定される欄について特活所見欄」と見なす操作的定義を採用したが、それでも分類の過程で恣意的な処理が介入した可能性は残る。ここでは係活動の事実欄が意外に少なかったことには、そうした微妙な問題があることを記しておく。

(3) 所見欄の評価様式

今回、状況欄は一校も見られなかったため、特別活動に関わる評価の独立欄としては、事実欄以外に所見欄がありうる。次に特別活動の所見欄の様式を見てみよう。上述の通り、これは当該児童の活動の様子を、文章で表記する欄である。文章で表記するため、それなりの大きさの欄が必要となる。もともと通信簿には、たいてい総合所見欄という類の欄があって、担任から当該児童や保護者に宛てて文章が記載される。ここでいう特活所見欄とは、それとは別に特別活動に関する所見のみを記載するために設定された独立欄のことである。

表6 西部1-3年特活所見欄の様式

	1年実数	%	2年実数	%	3年実数	%	実数平均	1-3年%平均
学期ごとの特活所見欄	23	32.4%	23	33.3%	23	32.9%	23.0	32.9%
その他	0	0.0%	0	0.0%	1	1.4%	0.3	0.5%
特活独立欄はあるが特活所見欄はなし	10	14.1%	10	14.5%	11	15.7%	10.3	14.8%
特活独立欄なし (総合所見欄等)にあり)	5	7.0%	4	5.8%	4	5.7%	4.3	6.2%
特活独立欄なし (まったくなし)	33	46.5%	32	46.4%	31	44.3%	32.0	45.7%
	71	100.0%	69	100.0%	70	100.0%	70.0	100.0%

※「その他」とは、学年に1つの大きめの特活所見欄が設定されているもの。

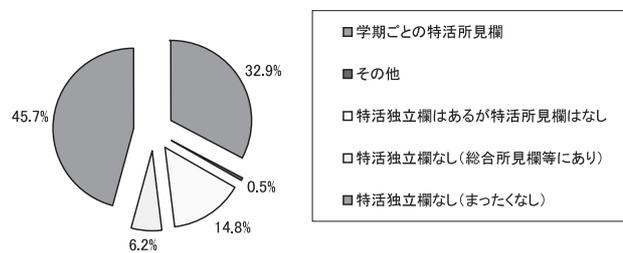


図5 西部1-3年特活所見欄の様式

表7 西部4-6年特活所見欄の様式

	4年実数	%	5年実数	%	6年実数	%	実数平均	4-6年%平均
学期ごとの特活所見欄	23	32.4%	24	32.9%	26	33.3%	24.3	32.9%
その他	1	1.4%	1	1.4%	1	1.3%	1.0	1.4%
特活独立欄はあるが特活所見欄はなし	22	31.0%	26	35.6%	26	33.3%	24.7	33.3%
特活独立欄なし (総合所見欄等)にあり)	7	9.9%	5	6.8%	5	6.4%	5.7	7.7%
特活独立欄なし (まったくなし)	18	25.4%	17	23.3%	20	25.6%	18.3	24.8%
	71	100.0%	73	100.0%	78	100.0%	74.0	100.0%

※「その他」とは、学年に1つの大きめの特活所見欄が設定されているもの。

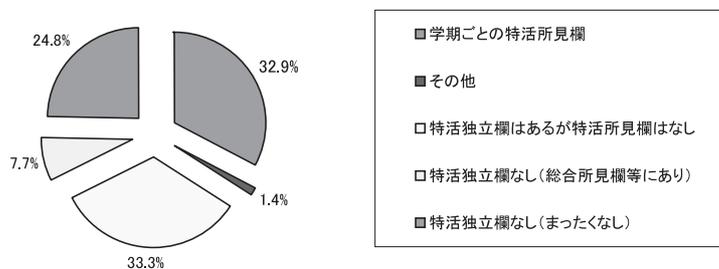


図6 西部4-6年特活所見欄の様式

る。

特活所見欄においても、やはり1-3年内部と4-6年内部の通信簿ではほぼ同じ傾向を見て取ることができる。西部管内の小学校については以下のことを指摘できよう。

特活所見欄（学期ごと）の多さとその一貫性

特別活動に関する所見を記入する欄を、総合所見とは別に設定している学校はけっこう多く、各学年とも約3分の1程度ある。これには学年による差異はほとんど見られない。つまり、特別活動の所見欄（学期ごと）を設定している学校では、1-6年一貫して同様の所見欄があり、そうした学校が約3分の1程度あるということである。委員会やクラブといった、学年限定の記載項目を含む事実欄とは異なり、所見欄自体には学年差はほとんどないのも当然かも知れない。

事実欄の裏返しとしての差異

にもかかわらず、1-3年と4-6年ではグラフの形がかなり異なっている。たとえば、4-6年において特活独立欄がない場合がやや少なく、その分特活所見欄なし（つまり事実欄あり）の場合が多いこと等である。

これは、所見欄自体の学年差というより、事実欄の違いの裏返しと見ることもできるだろう。つまり、1-3年の通信簿には独立欄はないけれども、4-6年では「委員会・クラブ」という事実欄のみを設定している学校の場合、その数字の違いを典型的に示していると思われる。上述の通り、今回クロス集計を行っていないが、そういうパターンの学校は2割程度ではないかと推測される。

(4) 学校ごとのパターン分析

以上、西部教育事務所管内の公立小学校から収集した84校分の通信簿を、①特別活動に関する独立欄の有無とその名称、②特活事実欄の有無とその内実、③特活所見欄の有無とその内実、の三つの観点で集計した結果を、1-3年と4-6年にまとめて報告し、そこから得られた知見を記述してきた。これでおおよその傾向は把握できるが、各

学校の実際の通信簿は、その組み合わせから構成されている。単純に考えて、「特活の独立欄がまったくない学校」「事実欄のみある学校」「所見欄のみある学校」「事実欄・所見欄ともにある学校」の4パターンが想定される。今回、クロス集計を行っていないため、どのパターンが多いのか分からない。そうした情報がなければ、有用価値が低いことは筆者たちも認識していた。

しかし、手がけてみると案外難しいことが分かってきた。まず、今回は状況欄がなかったけれど、将来的にそれを含めて考えておこなうなら3×3で9パターンと複雑になる。それに、学年による違いが介入してくる。既にみたように1-3年と4-6年では書式が異なる学校が多い。したがって、上記4パターンをさらに学年別二つの組み合わせで見なければならず、これだけで4×4の16パターンとなる。状況欄まで想定すれば、9×9で81パターンにもなってしまう。

それだけなら何とかできないこともなさそうに見える。しかし、ここまで1-3年、4-6年と強引にまとめて報告してきたが、実は細かく見ていくと特に4年の事実欄は1-3年とも5-6年とも違う面がある（クラブはあるけれども委員会はない）。それに伴い、中学年共通の書式としている学校では、3年にはないはずのクラブ欄があったりする（実際に行っているかどうかは不明）。また、1-2年と3-6年で共通の書式をとっているような学校もごく一部ある。そうした事例まですべて網羅できるよう6学年別にすると、これはもう手に負えない。さらに、一口に事実欄と言ってもその内実は既に見たように多様であり、所見欄との区別も曖昧である場合が多い。その詳細な報告まで含めて一編の紀要論文に紹介する紙幅はないだろうし、また前述した区分の恣意性を考えると、それをしたとしてどこまで意義があるのか疑問であった。また今回時間的余裕もなかった。

そこで、せめて次の数字だけでも明らかにし、その中で代表的と思われる通学年的パターンを文章表記することにした。

表8 学年を通してみた学校ごとのパターン分析

	実数	%
全学年を通して、特活独立欄が存在しない学校	22	32.4%
全学年を通して、特活独立欄が存在する学校	33	48.5%
一部の学年のみ特活独立欄が存在する学校	13	19.1%
合計	68	100.0%

※未収集(いずれかの学年の通信簿が欠けている学校)は除く(16)

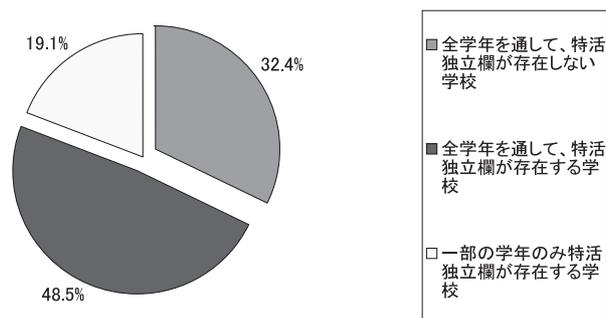


図7 学年を通してみた学校ごとのパターン分析

- ・全学年を通して、特活独立欄が存在しない学校
- ・全学年を通して、特活独立欄が存在する学校
- ・一部の学年のみ特活独立欄が存在する学校

西部の場合、結果は上に示したとおりである。

なお、ここでは一学年分でも欠けている学校は集計から除外したため、未収集扱いの学校が多くなった。それゆえ、前述のグラフと若干異なる部分がある。

まず、全学年を通して特活独立欄が存在しない学校は、約3分の1程度ある。ただし、特に明記されていないとしても、総合所見欄に特別活動の様子について記載する教師は多いと思われるので、そうした学校が特別活動を軽視しているということには必ずしもならないことはもちろんである。

また、全学年を通して特活独立欄が存在する学校についてはもっとも多く、およそ半数近くがそれに相当する。ただその欄の内実や組み合わせは多様である。どのようなパターンが多いのか。ここに正確な数字をあげることはできないが、筆者の集計作業時における印象として、次のような二つのパターンが多かったことを記しておく。

- ・1-3年では係等の記載を含む学期ごとの「事実欄」ないし「所見欄」のみ、4-6年では1-3年と同様に学期ごと係等を記載する「事実欄」ないし「所見欄」に、年間を通じて一つの「委員会・クラブ活動の事実欄」が付随する大きな独立欄となっている学校
- ・1-6年で共通して、学期ごとの「事実欄」ないし「所見欄」が設定されている学校

このように「全学年なし」「全学年あり」で全体の8割程度占めているが、一部の学年のみ存在する学校も2割程度ある。その内実も多様であるが、前述同様筆者の印象によれば、次のようなパターンが代表的であった。

- ・1-3年には独立欄がなく、4-6年のみ年間を通じて一つの「委員会・クラブ活動の事実欄」が存在する学校

(高橋)

3. 南部教育事務所管内の分析結果

(1) 特別活動の評価に関わる独立欄の有無とそのタイトル名

① 1-3年用

特活独立欄が設けられている小学校は、1-3年で69.0%である。特活独立欄はないものの、総合所見欄等にある小学校は2.1%となっており、まっ

たくない小学校は28.9%である。

特活独立欄が設けられている場合、タイトル名は、「特別活動の記録」等が40.6%と最も多く、次いで「特別活動の様子」等11.8%、「特別活動等の記録」等6.4%、「特別活動」等5.4%となっている。タイトル名がない小学校は、1.6%であった。

表9 南部1-3年 特活評価欄のタイトル名

	1年実数	%	2年実数	%	3年実数	%	実数平均	1-3年%平均
「特別活動の記録」等	25	39.7%	26	41.9%	25	40.3%	25.3	40.6%
「特別活動等の記録」等	4	6.3%	5	8.1%	3	4.8%	4.0	6.4%
「特別活動の様子」等	7	11.1%	8	12.9%	7	11.3%	7.3	11.8%
「特別活動」等	3	4.8%	3	4.8%	4	6.5%	3.3	5.4%
その他	2	3.2%	2	3.2%	2	3.2%	2.0	3.2%
タイトルなし	1	1.6%	1	1.6%	1	1.6%	1.0	1.6%
特活独立欄なし (総合所見欄等にある)	1	1.6%	1	1.6%	2	3.2%	1.3	2.1%
特活独立欄なし (まったくなし)	20	31.7%	16	25.8%	18	29.0%	18.0	28.9%
	63	100.0%	62	100.0%	62	100.0%	62.3	100.0%

※「その他」とは、「活動状況の記録」「係活動」

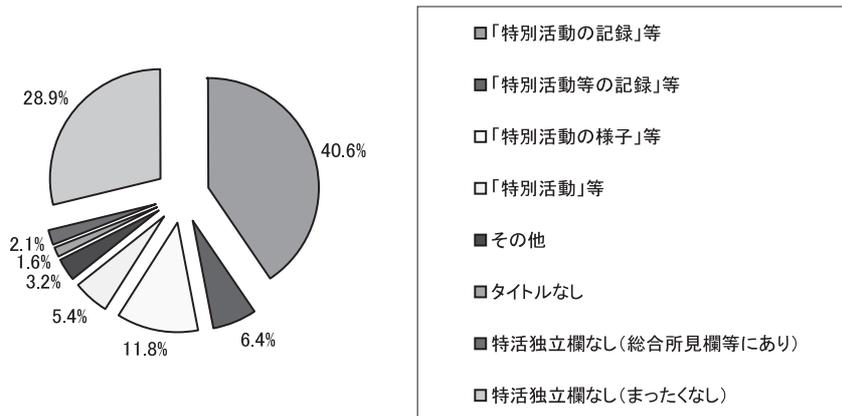


図8 南部1-3年 タイトル名%平均

②4-6年用

特活独立欄が設けられている小学校は、4-6年で83.9%である。特活独立欄はないものの、総合所見欄等にある小学校は4.5%となっており、まったくない小学校は11.6%である。

特活独立欄が設けられている場合、タイトル名は、「特別活動の記録」等が43.5%と最も多く、次いで「特別活動の様子」等12.1%、「特別活動」等9.1%、「特別活動等の記録」等7.6%となっている。タイトル名がない小学校は9.1%であった。

1-3年と4-6年とを比較してみると、大きな違

いは、特活独立欄がまったくない小学校の割合である。1-3年で28.9%、4-6年で11.6%となっている。1-3年までは特活独立欄を設けていないが、そのなかで4年以上になると約17%の小学校が何らかの形で特活独立欄を設けていることになる。

タイトル名については、全学年とも「特別活動の記録」等が最も多く、約40%前後を占めている。また、その他のタイトル名の割合についても、学年ごとに大きな違いはみられない。

表10 南部4-6年 特活評価欄のタイトル名

	4年実数	%	5年実数	%	6年実数	%	実数平均	4-6年%平均
「特別活動の記録」等	28	44.4%	29	44.6%	29	41.4%	28.7	43.5%
「特別活動等の記録」等	5	7.9%	4	6.2%	6	8.6%	5.0	7.6%
「特別活動の様子」等	8	12.7%	7	10.8%	9	12.9%	8.0	12.1%
「特別活動」等	6	9.5%	6	9.2%	6	8.6%	6.0	9.1%
その他	1	1.6%	2	3.1%	2	2.9%	1.7	2.5%
タイトルなし	6	9.5%	6	9.2%	6	8.6%	6.0	9.1%
特活独立欄なし (総合所見欄等にあり)	2	3.2%	3	4.6%	4	5.7%	3.0	4.5%
特活独立欄なし (まったくなし)	7	11.1%	8	12.3%	8	11.4%	7.7	11.6%
	63	100.0%	65	100.0%	70	100.0%	66.0	100.0%

※「その他」とは、「活動状況の記録」「特別活動の所属」

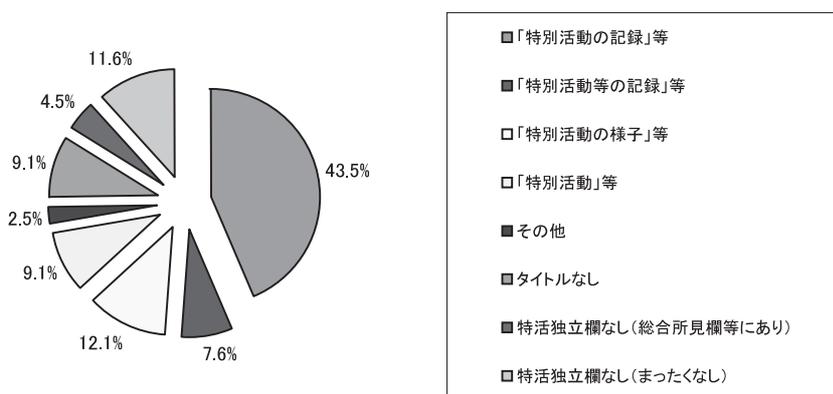


図9 南部4-6年 タイトル名%平均

(2) 事実欄の評価様式

① 1-3年用

特活独立欄を設けていて特活事実欄を設けているのは全体の36.4%，特活独立欄を設けているが特活事実欄を設けていないのは全体の32.6%となっている。特活事実欄を設けている小学校と、設けていない小学校がほぼ同じ割合となっている。

る。

特活事実欄を設けている場合の設け方は、「委員会・クラブ（学年ごと）、係など（学期ごと）」がほとんどを占めている。なお、1-3年は委員会とクラブ活動がないため、実際は「係など（学期ごと）」（係活動の事実欄が学期ごとに設けられている）パターンである。

表11 南部1-3年 特活事実欄の様式

	1年実数	%	2年実数	%	3年実数	%	実数平均	1-3年%平均
「委員会・クラブ(学年ごと)」	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
「委員会・クラブ(学年ごと), 係など(学期ごと)」	21	33.3%	23	37.1%	21	33.9%	21.7	34.8%
その他	1	1.6%	1	1.6%	1	1.6%	1.0	1.6%
特活独立欄はあるが特活事実欄はなし	20	31.7%	21	33.9%	20	32.3%	20.3	32.6%
特活独立欄なし (総合所見欄等)にあり)	1	1.6%	1	1.6%	1	1.6%	1.0	1.6%
特活独立欄なし (まったくなし)	20	31.7%	16	25.8%	19	30.6%	18.3	29.4%
	63	100.0%	62	100.0%	62	100.0%	62.3	100.0%

※「その他」とは、欄が小さいので所見欄ではなく事実欄（学期ごと）と考えられるが、「係」などの項目の指定は書いていないタイプ。

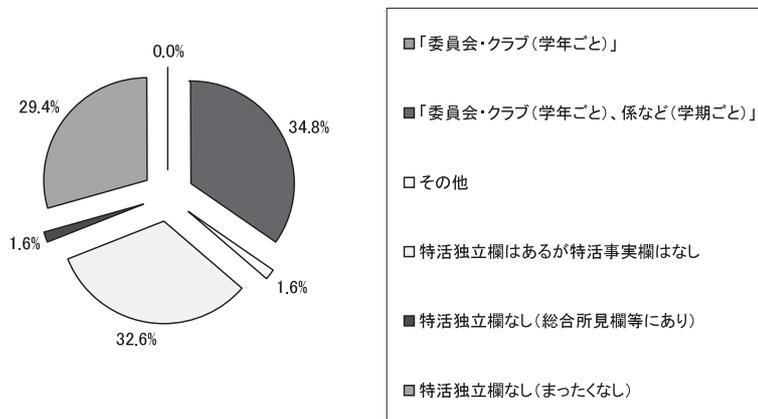


図10 南部1-3年 特活事実欄の様式

②4-6年用

特活独立欄を設けていて特活事実欄を設けているのは全体の82.8%，特活独立欄を設けているが特活事実欄を設けていないのは全体の1.0%となっている。特活事実欄を設けている小学校が圧倒的に多くなっている。

特活独立欄を設けている場合の設け方は、「委員会・クラブ（学年ごと）」が44.0%と最も多く、次いで「委員会・クラブ（学年ごと），係など（学期ごと）」が33.4%となっている。

1-3年と4-6年とを比較してみると、大きな特

徴は、特活独立欄を設けていて特活事実欄を設けている小学校が、1-3年から4-6年で大幅に増えるということである。逆に、特活独立欄はあるが特活事実欄はないという小学校が、大幅に減っている。すなわち、1-3年で「特活独立欄はあっても特活事実欄がない小学校」、および「特活独立欄がまったくない小学校」が、4-6年になると何らかの形で特活事実欄を設けている場合が多いことがわかる。その場合の設け方は、「委員会・クラブ（学年ごと）」のパターンが多くなっている。

表12 南部4-6年 特活事実欄の様式

	4年実数	%	5年実数	%	6年実数	%	実数平均	4-6年%平均
「委員会・クラブ（学年ごと）」	28	44.4%	29	44.6%	30	42.9%	29.0	44.0%
「委員会・クラブ（学年ごと）， 係など（学期ごと）」	23	36.5%	20	30.8%	23	32.9%	22.0	33.4%
その他	2	3.2%	4	6.2%	5	7.1%	3.7	5.5%
特活独立欄はあるが特活事実欄はなし	1	1.6%	1	1.5%	0	0.0%	0.7	1.0%
独立欄なし （総合所見欄等にあり）	1	1.6%	2	3.1%	3	4.3%	2.0	3.0%
特活独立欄なし （まったくなし）	8	12.7%	9	13.8%	9	12.9%	8.7	13.1%
	63	100.0%	65	100.0%	70	100.0%	66.0	100.0%

※「その他」とは、「委員会（学期ごと），クラブ（学年ごと）」「委員会（学年ごと），クラブ（学期ごと）」「委員会（学期ごと），クラブ（学年ごと），クラスの係活動（学期ごと）」

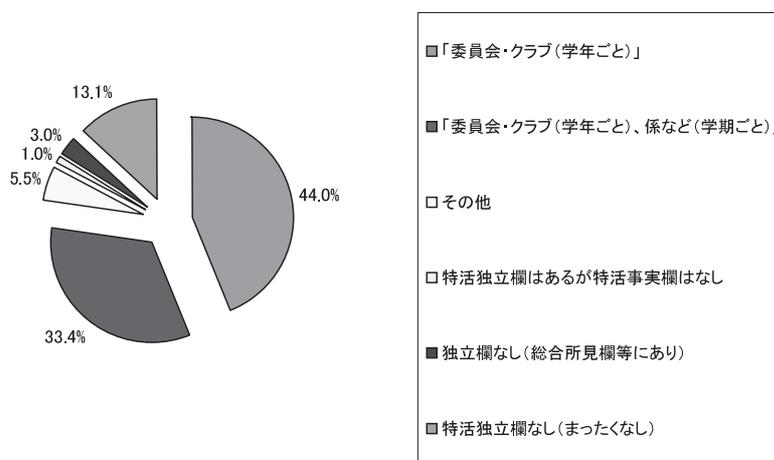


図11 南部4-6年 特活事実欄の様式

(3) 所見欄の評価様式

見欄を設けていないのは10.7%となっている。

① 1-3年用

特活所見欄を設けている場合の設け方は、すべて「学期ごとの特活所見欄」というパターンであった。

特活独立欄を設けていて特活所見欄を設けているのは58.3%、特活独立欄は設けているが特活所

表13 南部1-3年 特活所見欄の様式

	1年実数	%	2年実数	%	3年実数	%	実数平均	1-3年%平均
学期ごとの特活所見欄	36	57.1%	38	61.3%	35	56.5%	36.3	58.3%
その他	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0.0	0.0%
特活独立欄はあるが特活所見欄はなし	6	9.5%	7	11.3%	7	11.3%	6.7	10.7%
特活独立欄なし (総合所見欄等にあり)	0	0.0%	0	0.0%	1	1.6%	0.3	0.5%
特活独立欄なし (まったくなし)	21	33.3%	17	27.4%	19	30.6%	19.0	30.5%
	63	100.0%	62	100.0%	62	100.0%	62.3	100.0%

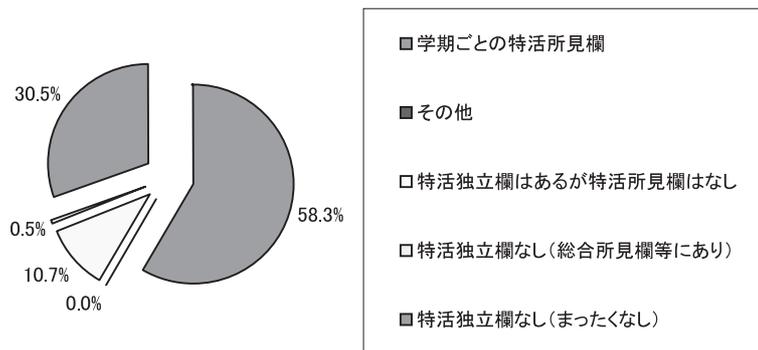


図12 南部1-3年 特活所見欄の様式

②4-6年用

特活独立欄を設けていて特活所見欄を設けているのは56.6%，特活独立欄は設けているが特活所見欄を設けていないのは27.3%であった。

特活独立欄を設けている場合の設け方は、すべて「学期ごとの特活所見欄」というパターンであった。

1-3年と4-6年とを比較してみると、大きな違

いは、「特活独立欄はあるが特活所見欄がない」小学校が、1-3年から4-6年で大幅に割合が増えていることである。「学期ごとの特活所見欄」を設けている小学校の割合は1-3年と4-6年とでほぼ同じであることから考えると、1-3年で特活独立欄をまったく設けていない小学校が、4-6年で特活独立欄を設けるが所見欄は設けない（つまり、特活事実欄のみ設ける）ことがわかる。

表14 南部4-6年 特活所見欄の様式

	4年実数	%	5年実数	%	6年実数	%	実数平均	4-6年%平均
学期ごとの特活所見欄	37	58.7%	36	55.4%	39	55.7%	37.3	56.6%
その他	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0.0	0.0%
特活独立欄はあるが特活所見欄はなし	17	27.0%	18	27.7%	19	27.1%	18.0	27.3%
特活独立欄なし (総合所見欄等にある)	1	1.6%	1	1.5%	1	1.4%	1.0	1.5%
特活独立欄なし (まったくなし)	8	12.7%	10	15.4%	11	15.7%	9.7	14.6%
	63	100.0%	65	100.0%	70	100.0%	66.0	100.0%

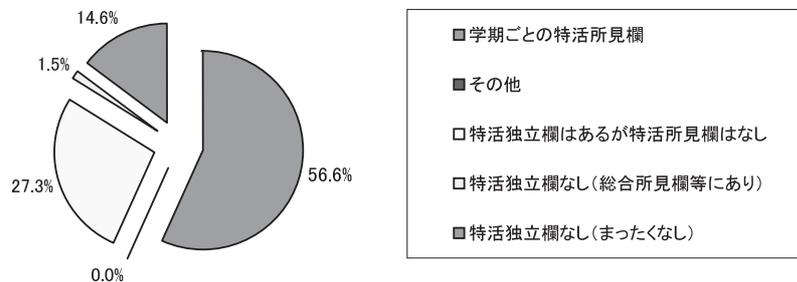


図13 南部4-6年 特活所見欄の様式

(4) 学校ごとのパターン分析

学校ごとの特活独立欄の有無、および設け方を分析すると、「全学年を通して、特活独立欄が存在する学校」が61.7%と最も多く、次いで「一部の学年のみ特活独立欄が存在する学校」が25.0%、「全学年を通して、独立欄が存在しない学校」が13.3%、となっている。

「全学年を通して、特活独立欄が存在する学校」の主な例としては、1-3年で「所見欄」のみ、4-6年で「(委員会)・クラブ活動の事実欄」と「所見欄」が設定されている場合があげられる。それ以外にも、1-6年でほぼ共通の「事実欄」と「所見欄」、あるいは「事実欄」のみが設定されている場合がある。

「一部の学年のみ特活独立欄が存在する学校」の主な例としては、1-3年は独立欄がなく、4-6年のみ「委員会・クラブ活動の事実欄」が存在する学校をあげることができる。

「全学年を通して、独立欄がない学校」は、1-3年でも4-6年でも特活独立欄のない学校である。

これらの学校ごとのパターン分析から、南部では、何らかの形で全学年を通して特活独立欄を設

けている学校が半数以上あり、逆に学年を通して特活独立欄を設けていない学校は1割強しかないことがわかる。

(綾)

4. 結びに代えて

以上、埼玉県西部教育事務所、南部教育事務所管内の公立小学校における通信簿において、特別活動に関わる評価の欄がどのようになっているかを報告してきた。本来まとめとして、西部と南部の比較考察を入れるべきではある。たとえば、学校パターン分析の結果、確かに西部、南部ともに共通する代表的形式を見出すことができた。

- ・1-3年では「係等(学期ごと)の事実欄」、または「学期ごとの所見欄」のみ設定されており、4-6年では「係等(学期ごと)、委員会・クラブ(学年ごと)の事実欄」と「学期ごとの所見欄」との両方が設定されている形式。
- ・1-6年でほぼ共通の学期ごとの「事実欄」と「所見欄」との両方が設定されている、または「事実欄」のみが設定されている形式。
- ・1-3年は特活独立欄がなく、4-6年のみ「委員会・クラブ(学年ごと)の事実欄」が設定されている形式。

以上の3つの代表的な形式を見出すことができたが、その他「全学年を通して特活独立欄がない学校」も存在する。どの形式がどのくらいの割合であるかについては、西部と南部とで異なっている。特に、西部と南部とで大きく異なる点は「全学年を通して特活独立欄がない学校」の割合で、西部は全体の32.4%であるが、南部では13.3%となっている。このことから、南部よりも西部のほうが全体的に概して簡略な形式となっていると考えられる。

(綾)

一見して、西部と南部でこのような共通点・差異点を確認できることは事実であるが、今回これ

表15 学年を通して見た学校ごとのパターン分析

	実数	%
全学年を通して、特活独立欄が存在しない学校	8	13.3%
全学年を通して、特活独立欄が存在する学校	37	61.7%
一部の学年のみ特活独立欄が存在する学校	15	25.0%
合計	60	100.0%

※未収集(いずれかの学年の通信簿が欠けている学校)は除く(14)

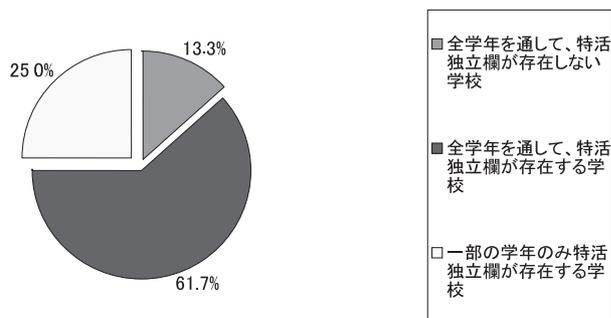


図14 学年を通して見た学校ごとのパターン分析

以上踏み込んだ比較考察は行わないことにした。一つには本稿はまだ中間報告であり、埼玉県下には今回の西部・南部以外に、東部教育事務所と北部教育事務所、そして政令指定都市のさいたま市もあるからである。たとえば、今回扱った西部・南部の収集校には、状況欄を含む通信簿は一校もなかったが、それ以外の地域には状況欄を含む通信簿があることは分かっている。それ以外にも、まだ見たことのないような、今回の分類に収まらないようなものが出てくるかも知れない。本格的な比較考察は今の段階では控えるべきであろう。

それにもう一つ、事務所単位で異なるというより、市町村単位での差異がそこに表れた可能性を加味する必要があると思われたからでもある。もちろん一つの市町村内部でも学校毎にかなりの多様性もあるが、一方、独自の参考様式なり「何らかの形である程度統一しているのではないかと推測されるような、似通った通信簿となっている市町村も一部に見られた。つまり、地域比較は興味深い複雑で困難な分析・考察であり、それを本格的に行おうとするならば、全体を見た上で、しかもレベル毎の差異を加味して総合的に行うべきではないか、ということである。それゆえ、ここでは本稿の意義や課題・展望等を若干記して「結びに代え」ることとしたい。

書式の多様性について

今回の作業を通じて、各学校の通信簿において特別活動を評価する様式の多様性に改めて驚かされた。通信簿には特に法的根拠はなく、書式も各学校の自由であって、多様であることはむしろ望ましいことかも知れない。もちろん、その多様性の是非について論じるつもりはないが、各学校において通信簿の書式を設定する際、他校の情報はどの程度考慮されているのだろうか。そうした疑問が著者たちの間で生じたことは否めない。本稿で示した情報があれば、各学校における改訂作業にわずかながら貢献できるかも知れない。それを願っている。

多様な書式を整理する分類枠組みの提示

また、研究上の意義として、「分類枠組み」を提示したことをあげることができよう。実際の通信簿における特別活動の評価様式とは、非常に多様であり、どのように整理して集計・報告すればよいのか、先行研究もほとんどない中、筆者たちは試行錯誤を繰り返した。その結果、事実欄・所見欄というタイプごと（それも実際には曖昧であり、定義を自作しなければならなかった）、学年ごと（1-3年、4-6年でまとめる）という形に落ち着いた。とりあえず現段階では、特別活動の評価様式がどうなっているか、わかりやすく示すことができたのではないかと自負しているが、この枠組みによって他の地域を分析する過程で問題が出てくるかも知れない。それは今後の課題としたい。（高橋）

【注】

（注1）

「4 特別活動の記録

小学校及び特別支援学校（視覚障害、聴覚障害、肢体不自由又は病弱）小学部における特別活動の記録については、各学校が自ら定めた特別活動全体に係る評価の観点を記入した上で、各活動・学校行事ごとに、評価の観点に照らして十分満足できる活動の状況にあると判断される場合に、○印を記入する。」

「7 総合所見及び指導上参考となる諸事項

小学校等における総合所見及び指導上参考となる諸事項については、児童の成長の状況を総合的にとらえるため、以下の事項等を文章で記述する。

- 【1】各教科や外国語活動、総合的な学習の時間の学習に関する所見
- 【2】特別活動に関する事実及び所見
- 【3】行動に関する所見
- 【4】児童の特徴・特技、学校内外におけるボランティア活動など社会奉仕体験活動、表彰を受けた行為や活動、学力について標準化された検査の結果等指導上参考となる諸事項
- 【5】児童の成長の状況にかかわる総合的な所見
（文部科学省初等中等教育局長「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）」（平

成22年5月11日)の「【別紙1】小学校及び特別支援学校小学部の指導要録に記載する事項等」より)

た学校に深く感謝する次第である.)

(注2)

集計作業のプロセスにおいて、基礎資料として各学校の学年別一覧表を作成した。本稿ですべてを紹介する紙幅がないのは残念だが、それを作成する際に使用した「基準」(一部抜粋)を以下に示しておく。

各項目の定義

①特活評価欄のタイトル名

- ・特別活動の評価欄が独立して設けられている場合は、その「タイトル名」を記した。
- ・独立した評価欄はあるが、タイトル名がない場合は、「タイトルなし」と記した。

②特活事実欄の様式

- ・特活事実欄が設けられている場合は、何を(委員会・クラブ・係など)、どの時期に(学年ごと、学期ごと)評価するかを明記した。
- ・特活独立欄はあるが、特活事実欄はない場合は「空欄」にした。

③特活所見欄の様式

- ・特活所見欄か特活事実欄か判断の難しいものについては、おおよそ2行以上のコメントを記入できると想定される欄について特活所見欄と見なした。
- ・特活所見欄が設けられている場合は、評価する時期(学期ごと、学年末)を記した。
- ・特活独立欄はあるが特活所見欄はない場合は「空欄」にした。

【参考文献】

文教大学教育学部教職課程高橋研究室『埼玉県公立小学校通信簿における特別活動の評価様式～西部・南部5・6年向け通信簿の分析～』(教育学部共同研究による未公刊内部資料)2011年

中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)』2008年

国立教育政策研究所『通信簿に関する調査研究』2003年

文部科学省初等中等教育局長『小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について(通知)』2010年

(本研究は、本学教育学部共同研究費によって行われた。また、通信簿の収集にご理解・ご協力頂い